BROADCASTING CREATORS' ASOCIATION

放送人の会

NO・23

2005・5・23発行

〒102－0094　千代田区紀尾井町1－1　千代田放送会館　3階
TEL&fax　03－3221－0019　Email　info@hosojin.com
代表幹事　大山勝美　　編集担当　伊藤雅浩、松尾羊一

2005放送人グランプリ決定

〈放送人が選ぶ放送人の賞〉、第4回「放送人グランプリ」は、去る4月8日(金)、千代田放送会館で選考委員会(川口幹夫委員長)が開かれ、会員によるノミネート(同封別冊参照)を土台に討議を重ねた結果、次の方々にそれぞれ表記の賞を贈ることに決定。

贈賞式とレセプションは5月20日(金)午後4時から、NHK青山荘で行われた。

グランプリ

第19回民教協スペシャル「あなた　また戦争ですよ～残された妻たちの手記」(山形放送)の五十嵐重明、大沼潤ほか制作スタッフ

民教協スペシャルは長年にわたり系列を超えて良質のテレビ番組を提供してきた。この作品(05年2月11日放送)は太平洋戦争での体験を手記に綴った山形県の女性たちを取材して、時代背景やその心情を丹念に描いた。「あなた、また戦争ですよ」というタイトルに象徴されるように、記憶の風化が進みつつあるいま、具体的で生々しいことばのひとつひとつが胸を打つ。時宜を得た企画と制作の成果に対して。

特別賞1、鶴橋康夫

テレビドラマ「砦なき者」(04年4月3日テレビ朝日放送、野沢尚脚本)で、テレビメディアの構造と個人の内面の今日的問題に取り組み、ジャーナリスティックな視点からのすぐれた映像表現に成功し、テレビドラマのさらなる新境地を開拓した。その成果に対して。

特別賞2、杉浦圭子

「生活ホットモーニング」(NHK)などで、身近な視点とやわらかな表現で、親しみやすく、しかし独特の鋭さを持つ知的な生活情報番組の表現を開拓した。

また、「くらしが変わるもの知り旅」シリーズ(NHK)で各地の職人たち(の丁寧で繊細な取材も目だっていた。これらの地道な努力と成果に対して。

特別賞3、金平茂紀

TBSワシントン支局長として「ニュース23」(TBS)ほかで連日、独特の視点からアメリカの政治、経済、社会、文化の断面を的確に伝え続け、混迷する時代の中の海外情報の新しい伝え方を開拓した。また、赤坂夜塾やメールマガジンの活動を含めて、ジャンルにこだわらないテレビの可能性を常に模索し続けた努力と成果に対して。

特別賞4、「陶山賢治の時の風」(南日本放送)のスタッフ(代表・陶山賢治)

時代の風を地域の視点でとらえ、偏向を恐れず果敢に取材を行い、わかりやすく表現した。この地域報道番組を長年にわたって地道に続け、その集積から「小さな町の大きな挑戦」やハンセン病への取り組みなど数々のすぐれたドキュメンタリー番組を生み出した。地域報道の原点を追求する姿勢と努力そしてその成果に対して。

左から(上段)田上憲一郎　亀田晃一　金平茂紀　陶山賢治　大沼潤(中段)山縣由美子　鶴橋康夫　五十嵐重明(下段)杉浦圭子　川口幹夫

審査委員長　講評

川口幹夫

私にとって、このグランプリ選考会くらい楽しい会はありません。会員から寄せられた数多くの推薦文に目を通し、委員の皆さんと話し合っていると、現役時代に「今度の番組はどうか」とか「あいつに（番組を）作らせたら」などといった思いに、自分が現場で活躍していた過去の歴史に重なるからです。

その意味で、今回選ばれた人とその業績の中に、自分を発見することができたのはうれしいことでした。

例えば『あなた、また戦争ですよ』はおばあちゃんの幾つかの物語ですが、私も兵隊に行ったことがあります。旧制高校のころで、おばあちゃんっ子だった私に当時77歳だった祖母は「おい！幹夫。戦争の始まったとよ。お前は死んじゃいかんよ」と私を抱きしめて言いました。今回の作品でそのことを思い出しました。

男達は勝手に戦争への線路を作り、他の男達もその線路の上を走っていった。それを引き止め、「あなた、また戦争ですよ」と現代へつなげてみる女たちの目から描いたことで感動を呼んだと思います。

また『時の風』は、陶山さんらスタッフの一貫した取り組みに私の郷里が見え隠れし、その重いが現代につながる姿勢を読み取ったものでした。

康夫ちゃん（笑い）もそうです。私が現役のころ、ドラマ『仮の宿なるを』でしたか、感動のあまり見終わるや見ず知らずの演出家にいきなり電話したものです。その思いが今度の『皆なき者』に重なるのです。

金平さんの単なる外信記者を超えた視点からの読みの深い報道姿勢、また杉浦くんの日常としてのテレビへのさりげない話しかけと親しみやすさ、ここにもテレビがありました。

放送の未来を語ることの多い時代ですが、その前に、現代をどう表現するか、われわれが選んだ人たちは何を語っているか、現代を見つめることで未来が見えてくるものなのです。

そんなことを考えた第4回の《放送人が選ぶ放送人の賞》でした。

皆さん、あらためて、おめでとう！

大沼　潤

このたび、放送人グランプリという栄えある賞をいただくことになりました。地方から発した「かすかな声」が放送というメディアを通じて日本中に届き、かつ多くの方々の心を動かしたことに、放送にたずさわる者の一人としてあらためて驚き、感激しております。

「あなた、また戦争ですよ」とは、山形県大蔵村に住む中島キク子さん（79歳）の書いた手記の一節です。アフガン、イラクとたて続けに起こる戦争、そして犠牲となる市民。テレビで報道される痛々しい現実を嘆き、「この世ではまた戦争をやっているんですよ」と、亡き夫に静かに語りかけているのです。

この一節に出会った時に私たちは激しく心を揺すぶられているような気がしました。「60年前にあれだけの犠牲をはらってあなたたちに新しい時代を託したのに、その責任をはたしているのですか」と問いかけられているようでした。

戦争の記憶を風化させてはならない…と、これはわれわれが慣用句のように使っていることばです。毎年8月15日がやってくるたびに終戦記念日特集を編成することで、われわれはその役割をきっちり果たしていると思っていました。これまで誰も取り上げなかった戦争の秘話や証言を掘り起こしスクープすることを、そのことだけを追いかけていやしなかったかと取材しながら常に考えていました。

「風化させてならないもの」とは“あの時”日本の誰もが感じた、悲しみ、空しさ、痛さ、そして「もう金輪際こんなことはごめんだ」という感情そのものではないのか。そしてそれは、戦争を体験した方々だけにしか語れない…しかし体験した誰もが語ることのできる貴重な記憶なのです。

番組の取材過程で、若いスタッフから「そういえばうちのばあちゃんも…」「うちのじいちゃんの話では…」という言葉が何度も出ました。この番組に登場する「妻」たちだけが特別な不幸を背負ったわけではありません。戦争というものの不条理、おぞましさ

はまず家庭の中で語り継ぐことができるはずです。そう考えると日本中のどの家庭にも戦争の語り部はまだたくさんいるわけです。

戦争を知らない世代が番組を作り、さらに次の世代に伝える時代になりました。あらためてその責任の大きさを考えています。

杉浦圭子

五年半担当した「生活ほっとモーニング」を卒業して、ほっと一息。でも皆勤賞の他には何かをやり遂げたという実感も無く、この早出勤務の日々は一体何だったのかと、ぼんやり考えておりました。デイリー番組の担当者ならどなたも心当たりがあると思いますが、わが身を切り売りして後には痩せ細った自分が残っただけ、そんな淋しい感覚もありました。

そんな時、今回の受賞のお話を頂きました。全く思いがけないことでしたが、おかげ様で終止符をキッチリ打ち、気持ちを整理することが出来ました。心より御礼申し上げます。

「生活ほっとモーニング」は、ちょっとした暮らしの知恵から人生の深遠を見つめるドキュメンタリーまで、あらゆるテーマでお送りしています。世の中にある（起きる）全ての事柄を等身大に捉え直して、暮らしにどう関わるかをお伝えするのが、生活情報番組です。そして私は密かに、『共感してもらえる番組』を目指しました。

「ああ、そうだよなぁ。そういう生き方、考え方もあるのか。私も前に向かって一歩踏み出してみよう。」視聴者の方にそんな風に番組を見ていただき、少しでも皆の幸せに繋げることができたらと、おこがましくも思ってきました。

『共感』していただくためには、上から見下ろすような発言や、カッコいいけれどその場限りの無責任な発言は、出来ません。日替わりで押し寄せる様々な番組テーマを、自分や自分の家族だったらどうするのかと、私はひたすら我が身に置き換えて、インタビューし、コメントしました。

それが出来たのも、番組の精神に賛同し協力して下さった多くの出演者の皆さんのおかげです。中でも、統合失調症や認知症、ハンセン病をめぐる実情を伝えるために自らの体験を語って下さった方々、日本のがん医療を患者本位のものに変えようとメッセージを発し続けて下さった方々、お一人お一人の言葉が忘れられません。ハンセン病から回復されたある男性は、後遺症の外見を指して、いわれのある差別”と、おっしゃいました。でも人間は、『知性』と『勇気』によって差別をのり越えることが出来るはずだと・・・。

私は途中下車しましたが、家族のように苦楽を共にして来た仲間たちによって、番組は今も走り続けています。これからも「あなたのお側に『生活ほっと』！」。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

鶴橋　康夫

満作やもったいなくもありがたや
亀鳴くや鶴の一声前のめり
振り向かせたくて囀る四十雀
林檎咲く心の砦守りつつ

池端俊策脚本「ぶるうかなりあ」の撮影の真っ最中でした。突然のぎっくり腰です。ベッドに横たわろうにも、冷凍のマグロみたいに、背筋を硬直させたまま転がるしかありません。

スタッフは、車椅子を目の前に置きます。手を差し伸べては目を逸らします。みな、憐憫の表情です。それでも、負けずに、撮影を続けます。後は、馬鹿さわぎ、祭りのロングランです。

祭りなら、踊りです。身過ぎ世過ぎの踊りです。フロートよりも緩やかに、お神輿よりもきらびやかに、片足重心、髪を洗うような姿勢で撮影現場を遊泳します。まるで、神に祈っているような姿でもあります。

そんな時です。

村木さんから電話があります。

グランプリ特別賞だ、と。

穏やかな声です。ふわりとした村木さんの笑みが浮かびます。この人から、ずっと若い時に、「テレビジョン」の語源を教わった。僕の先生の一人であります。

唐突に、豪華な額縁入りの絵画になって先輩たちの顔が数珠繋ぎに浮かびます。

「もしもし、村木さん、これって談合ですかねえ。野沢のことがあったりして…」

「いえ、心配しなくていいです。得票数もかなりありましたから」

これまた唐突に、無観客試合のサッカー選手を思います。

競技場入りするバスの窓から雰囲気の高まりを感じ、場内の壁に伝わるスタンドのざわめきに包まれ、ピッチで歓声に気おされる。選手はそんな観客の熱気に感謝しながら、戦いへの最後の準備を整えるのでしょう。それが、無人だとすると…。

僕にとって、「放送人の会」の人たちは、貴重な観客だったのです。その人たちから誉めてもらえます。

電話を切って、近くの洋服屋へ駆け込みます。プライドをかけた結果、半額になった冬物の背広を掴まされてしまいました。それを着て総会にのぞみます。

ありがとうございました。
金平茂紀さんと一緒なのもいい。
野沢尚の一周忌も、もうすぐです。
耳朶舌で転がすように初夏の風
かりんの実忍び笑いのように揺れ

金平茂紀

テレビニュースの仕事は、とてもやりがいのある仕事だ。そのやりがいがどこに根ざしているのかの考え方は、個人によって随分違うだろう。僕の場合は、「公共性」への奉仕と、「自己表現」という、ある種のエゴイスティックな欲求とが、互いに排斥しあわないで微妙なバランスを保ちながら仕事を続けてきたからだと思っている。それはともかく、放送人グランプリ・特別賞をいただけるとのお知らせをいただいた前後、僕自身の身辺で「想定外」のことがいろいろと起きた。

ひとつは、ボーン上田国際記者賞というご褒美をいただいたこと。実際、これは「想定外」のことがらだった。ただ、ワシントンの地から真の「公共性」とは何かを考えながら、やりたいようにやってきたことが評価されたのは素直に嬉しかった。それからまもなく今度は自分の所属している会社でのポジションが変わることになった。これも「想定外」の展開。そして今回のグランプリ・特別賞。「放送人の会」は、いわば身内のような存在だと日頃から思っているので、何やら気恥ずかしい思いがするというのが正直なところだ。

他の受賞者の方々の素晴らしい業績を聞き及ぶにつけ、なおのことその思いは強まるばかり。なかでも、鶴橋康夫さんの『砦なき者』は、ワシントンにビデオを送っていただき見ていて、深く考えさせられた作品だった。

「これは僕らのことじゃないか？」その後の原作者の自死という衝撃を、いかに報道人として〈内化〉していくのか。その答えはまだみつからない。

『時の風』は、地域＝コミュニティーこそが「公共性」の基盤だということを証明し続けている。僕は、陶山さんからいただいたある一本の電話のことを忘れられない。東京で夜のニュース番組の編集長をしていた頃、ハンセン病患者の国家賠償訴訟で国の控訴期限が翌日に迫っていた午後のことだ。スタジオに原告の患者さんたちが十人以上生出演されて、思いのたけを訴えた。その訴えを聞いていて不覚にもスタジオのサブの片隅で、今、目の前で起きていることの重みに胸が一杯になってしまった。怒りがまっすぐに突き刺さってきたように感じた。

こうしていくつかの「想定外」の道行きで、僕は東京に舞い戻ってきた。考えてみれば、僕らの仕事であるニュースは「想定外」がそもそもの始まりじゃないか。自分に言い聞かせている。たじろぐな！5月7日、オランダ、マアストリヒトにて。

陶山賢治

思いがけない受賞でした。普通の人たちが、普通の思いで作っている、いたって普通の地味な番組が賞をいただくとは…。えいっ！乾坤一擲、大上段に振りかぶっている訳でもなく、まして「志」などという古色蒼然とした思い入れを注いでいる訳でもなく、淡々と、伝えたいことを伝えて九年目。放送人の会という、プロ中のプロの方々でつくる団体から、破格の賞をいただくことに、恐縮のあまり身が縮み

そうな想いでいます。

土曜夕方30分のニュース番組を立ち上げたのは1997年。「時の風」というスマートなのか、ダサイのかよくわからない名前を付けて、特集枠を売りにしたのも、正直、深い理由はありません。何しろ、ローカルの土曜はストレートニュースがないのです。なければ、何かで埋めるしかない。じゃ、特集を軸に…という窮余の策でした。

その特集枠が、二年、三年経つうちに、にわかに化け始めます。ハンセン病問題、ダイオキシン問題、ドミニカ移民問題など長期取材型の硬派ネタに始まって、家族、障害者、ジェンダー、子育て、防災、薩摩文化復興、宗教から果てはイラク戦争、憲法問題、メディア規制…記者、ディレクターの持ち込むテーマは360度全方位型の、しかも、激烈極まりないものばかりになりました。この数年間にゲスト出演したメンバーといえば、加藤周一、辺見庸、藤原帰一、上野千鶴子、加藤登紀子、岡留安則…「偏向を恐れず」という受賞理由を読みながら、「うーん、ま、仕方ないかなぁ」と苦笑するばかりです。

ふだん、短距離走ばかり走っている報道記者には、マラソン初挑戦の前の中距離走のトラックとして、ふだん長尺ものを専らとする制作ディレクターには手ごろなジャギングコースとして、振り返ってみると、MBCの報道制作を支えてきた現場スタッフたちが、この不思議な番組を走り抜けることで、「伝える者としての芸域」を確実に広げてきています。不透明で、不機嫌で、危ない時代―。そんな時代であればあるほど元気になってくる番組。たとえ独善といわれても「伝えなければならないこと」がある。ひたすら現場力を信じて、全員が参加して、しかも、あくまで楽しく！

そんな奇妙な番組が、列島の端っこで明日も確実に続いているために、「おい、頑張れよ」と思い切り背中を叩かれてしまった。

うれしい、と思います。

鵠沼海岸から⑯

川口幹夫

「ひっこしました！」というハガキがきた。NHKで五十年来の友人館野さんからである。奥さんに先立たれて思い立ったという。

「となりが池です。のんびり画を描いて遊びます」とある。池の名は「とんびが丘の池」だそうな。

「うらやましい！」と思った。

館野さんはただの素人ではない。あのチャーチル会にも入っているのだ。素人の中では玄人に近い素人といえる。

それにしてもあの画を描く才能というのは、あれはどういう才能なのだろう。

サッサッと絵筆をふるったり、コチョコチョとBBBの鉛筆を動かしているうちに見事な画が出来上がる。単純な線と色彩の濃淡だけで「へえ！」と驚くような作品になるのだ。

全く絵心のない私には完全にお手上げである。

昔、尾道から島づたいに四国まで旅したことがある。「しまなみ海道」という。尾道を出てすぐの島が「向島」、次の島が「因島」、そして次が「生口島」だ。この生口島こそあの平山郁夫さんの生まれた島なのである。今この島には平山郁夫美術館があって、そこに厖大な平山さんの画が陳列されている。

目をひくのは、平山さんが小学生の時にスケッチした風景画である。

「え？これが小学生の…！」と驚くような作品が並んでいる。

私はその作品を見て、平山さんの画すべてに感動した。そして思った。画こそ正に天才の成せる業だ。

館野さんの画にも同じような感銘を受けた。だから「とんびが丘の池」のまわりの風景を私はこれからもたっぷり享受するだろう。

もう一つ平山郁夫さんについて私が感動したことがある。それはどんな忙しい旅の途中にも必ずスケッチブックを広げて、あっ、という間に風景をうつしとることだ。

その早やさと、その集中力と、そのあとの丹念な仕上げにはホトホト感動した。天才は同時に努力の人でもある。

平山さんは鎌倉にお住まいだ。画室を訪ねると、そのたびに新しい感動が湧いてくる。鑑真和上のお里帰りの時中国へお土産にされた障壁画は制作の途中で拝見した。すばらしい制作だった。体が震えた。天才の画だった。

入会しました よろしく…

アナウンサー60年

吉村光夫

放送界に身を投じ、というほどの人生ではなかったが、アナウンサーとなってＮＨＫの鹿児島放送局でマスコミの一員になり、三年後始まった民放ラジオ東京に転じて花のお江戸の大舞台を踏めるようになったのは幸せで、上司に恵まれたりそうでなかったりしたものの、諸先輩の指導宜しきを得て、概ね編成現場の輪番勤務を転々、小規模ながら予算らしきものを扱うようになったのはテレビ番組宣伝部に移ってからだ。

最初は細々と15秒のスポットフィルムを作っていたが、やがて30分の生放送「夕やけロンちゃん」という宣伝番組に発展、構成だけでなく50歳過ぎて若い娘さんと並んでの司会は予想外の出来事だった。

時間に縛られ奔放でない生活？が幸いしてか定年後は胃の定期検診は受けるものの大病はなく、昼は明るい模型電車作り、夜はテレビを見てケチをつける暗い生活。

気が滅入る一番の出来事は大したことないニュースがスーパーインポーズで入って番組の筋を乱すこと。その次はスーパーの文字を間違えて事務的に行われるお詫びアナの多いこと。ボランティアの人にチェックをお願いしているのだろうか。

50年も前のことだからもう時効かもしれないが、私もテレビ開局の慶祝番組で「二人三番叟」を「二人三脚」とミスした前科があるので大きなことは言えないが、放送事故は人命に影響ないというものの、交通事故を扱う番組等では、原因追求はサツに任せ勝手な推測はしないほうがいいのではなかろうか。こんなことを言えるのもあと何年か。（もとＴＢＳ）

美術デザイン・美術進行

橋本　潔

昭和27年ＮＨＫテレビ実用化試験局がスタート。数えるほどのスタッフで6ヶ月後に本放送だった。とにかく人手が足りない。デザインだけでなく演出、ＦＤ（ＡＤ）、大道具、小道具、衣装も兼務。番組のデザインを描き上げると、まず大道具費の工面、当時の試験局には大道具発注の予算がない。やっとお金の出所を確保してもらって発注する。経理から「稟議書」は？「見積もり」は？「検品検収」は？と叱られる。そのような手続きでは大道具はいつスタジオに飾れるか判らない。大道具の次は調布の高津に小道具探し。さらに衣装、かつら、履物の調達に奔走する。

当時「ドサ回り」一座や軽演劇の世界では、裏の仕事をすべて纏めてこなし、開幕ベルのない小屋では、ピリピリと笛を吹きながら幕を引くという「進行さん」と呼ばれる人がいた。このことを思い出して「美術進行」と名付けたら、そのままタイトル上に表示された。

本放送後しばらくしてからデザイナーはデザインに専念し、それにともない「美術進行」は専門職となる。この不思議な職種の名前は、石川甫、橋本信也さんがＴＢＳ（当時のＫＲ）に移籍されたときに「美術進行」そのまま伝わったと思う。ＫＲの「私は貝になりたい」の美術・坂上健司さんに「放送人の会」のインタビューでお聞きしたら、ＫＲ開局時には「美術進行」という名前は存在していたそうです。ＮＨＫ開局当時、日本テレビ放送網とは熾烈な開局日争いのなかだったので、私にはライバル局日本テレビのことは判らない。「美術進行」の名前が存在していたかどうか知りたいと思う。

ＮＨＫでは入局すると、まず「美術進行」となり、美術部門、裏方全般を体験してから演出に転出するというコースが決まっていた。

「美術進行」は年数を経て「美術制作」と当を得た名前に落ち着く。ＮＨＫではまだ「美術進行」は存在する。民間放送では番組の局外発注や局内制作のスケールが大きくなるに従い「美術プロデューサー」と名称を変えていった。

「ＮＨＫにはラジオの専門家はゴマンといますが、ラジオを絵にする専門家は誰もいません」と始まったテレビ美術は「美術進行」ひとつでも紆余曲折を重ねている。

なお、橋本潔さんは創世期のテレビで映画とも舞台とも違う映像美術を模索されました。次号から氏の連載が始まります。期待してください。

2004年度会計報告　(2004年4月1日～2005年3月31日)

＜収入＞	
前年度繰越金	4,340,807
2004年度収入	
会費（含む入会金）	1,870,000
放送番組センター共同事業契約金	3,000,000
放送番組センター助成金(放送論研究)	1,000,000
放送文化基金助成（日韓中ﾌｫｰﾗﾑ05）	400,000
イベント関連収入	268,000
寄付・利息その他	30,018
2004年収入合計	6,568,018

＜支出＞	
一般管理費	2,648,374
事業費	2,165,221
2004年支出合計	4,813,595
＜次年度繰越金＞	6,095,230

2005年度(平成17年度) 予算案

＜収入＞	
前年度繰越金	6,095,230
会費収入（含入会金）	2,300,000
放送番組センター共同事業	3,000,000
イベント関連収入	300,000
2005年収入合計	11,695,230

＜支出＞	
一般管理費	3,480,000
＜内訳＞	
人件費	1,100,000
事務所費	400,000
通信交通費	500,000
会議費	300,000
印刷費	500,000
各種謝礼	150,000
ウェブサイト管理費	380,000
事務用品費	100,000
雑費	50,000
事業費	6,100,000
＜内訳＞	
放送人の世界・名作舞台裏	1,200,000
人気・ベスト番組	300,000
シンポジウム・囲む会	400,000
放送人の証言	700,000
地域番組フォーラム	400,000
放送人グランプリ	350,000
放送論研究会	
ラジオ・プロジェクト	150,000
日韓中ﾃﾚﾋﾞ制作者ﾌｫｰﾗﾑ	1,400,000
予備費	200,000
次年度繰越金	2,115,230

2004年度会計報告については、川竹和夫、寒河江正両氏による監査・承認を受け、5月20日の総会で、会計報告、予算案ともに承認されています。

イベント・あらかるとイン・横浜

第2回　公開対話
川口幹夫 ～ 私のベスト番組

上映作品『光子の窓』『シャボン玉ホリデー』『夢であいましょう』『ドラマ人間模様　冬の桃』

・コーディネーター　大山勝美

（4月2日　於・放送ライブラリー）

今回は芸能・ドラマ畑出身で唯一、NHK会長職をつとめあげた川口幹夫名誉会長の登場で、NHK、民放を問わず選んだ番組のさわり集を上映しながら往年の名物番組への思い、テレビの現場を縦横に語った。

バラエティーでは民放の自由な発想に触発されたとして、後の『夢あい』『黄金の椅子』そして『紅白』さらに科学バラエティー『ウルトラアイ』では、理系の教養担当者をその気にさせ、山川静夫アナを「発見」。ドラマでは映画演出を重視した『土曜劇場』を、ついで『人間模様』枠でNHKドラマを確立した総局長時代。中でも『冬の桃』（77年）が最も印象に残るドラマったという。俳人西東三鬼（小林桂樹）が芭蕉と重なる異色脚本（早坂暁）で娼婦（三田佳子）と妻（三田和代）が芭蕉にからみ、三鬼の心情でもある「ひとつ家に遊女も寝たり萩と月」と展開し、深町幸男の出世作ともなった云々。

軽妙な〝川口節〟溢出でさりげなくNHK問題にも触れ元「会長は快調です」の3時間半でした。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

公開セミナー　放送人の世界
第7回　赤井朱美　～人と作品～

今回は女性制作者をことさらに意識した企画ではありません。文芸界での推理小説や時代小説、それ以外の分野でも女性の進出は刮目すべきものがあり、放送界も例外ではなく「紅一点」などという男社会からみた言葉はとっくに死語となりました。金沢敏子（北日本放送）・中崎清栄・（北陸放送）赤井朱美（石川テレビ）の三氏は「元気印の北陸三婆」という男サイドからのやっかみめいた賛嘆の言葉があるほどですから。

今回の赤井氏を手はじめにその業績をとりあげることにしました。

◆2月5日（土）

『奥能登　女たちの海』（03年）

『日本へのラブレター～フォスコの愛した人たち』（04年）

◆2月12日（土）

『ここに家族あり』（87年）

『能登の海　風だより』（93年）

主催　放送人の会　放送番組センター

会場　横浜放送ライブラリー会議室

◇　◇

海洋民俗学の研究テーマで紹介されてきた能登の海女習俗を映像化、長期取材を通して海女たちのたくましい生き方を作品、彼女たちをいち早く着目したイタリアの知日文化人類学者F・マライーニの足跡を追った作品、そして原発騒動でゆれる地方の「時間」を、生活者の眼からみつめ、静かに告発した作品、また知的障害者の青年たちと彼らを支えた「若人の家」をめぐる生活を描いた作品…それらの作品系譜に流れるリアリズム表現に見え隠れするリリシズム。映像記録による土着の物語世界の構築、それをひろくドキュメンタリーと呼ぶならば、それこそが赤井ドキュメンタリーの文体です。

海女にすなどりの老夫婦、魚の行商に助産婦…過疎化に原発問題が絡まる地方の政治・経済のはざまでゆらぐ地方民放の苦悩、生活者の眼で告発する視点の厳しさなど、映像の裏の現実を率直に語ってくれました。地方の映像作品を見たいという関心は強く、地道な作品公開に会場は両日とも満席でセミナーは盛況裏に終わりました。

第11回　名作の舞台裏　（3月18日）

『黒革の手帖』（テレビ朝日）

（於・横浜情報文化センターホール）

◆今回は話題の作品上映と華やかなゲストを招き「舞台裏」始まって以来の前人気となりネット応募を含め、応募者は定員の6倍余が殺到、ライブラリー側も急遽会場を変え広い市民文化ホールなどに打診したが、あいにく卒業式や入社式シーズンと重なり、それも不可能となったほどだった。

ゲスト　米倉涼子　山本陽子

内山聖子（テレビ朝日　制作2部主任）

備前島文夫（前作　同ドラマCP）

（司会）石橋　冠（放送人の会）

◆裏金の預金名簿を記した黒革の手帳を武器にして銀座の高級クラブのママにのし上がる女をめぐり、色と欲と虚名にうごめく男たちの実態と悪女といわれる女の内実を描いた清張の名作。興味深かったのは、前作の『黒革』（82年）も見ているドラマ好きの観客が多く、二人の「元子」役への演技や役作りへの関心が集中し、ゲストと観客が名作を共有する楽しさにあふれたことだった。

前作が放送された82年は、ロッキード裁判で話題をまいた証人榎本三恵子の「蜂は一度刺したら死ぬ言いいますが、私も同じ気持ち」とうそぶいた暴露発言や、オンラインシステムを利用して一億五千万円を横領した大阪の三和銀行茨木支店預金係伊藤素子事件があったりして「作品に現実の事件を重ねあわせて見られたフシがあり、視聴率も高かった」と備前島氏はいう。リメーク版はさらに深化し、カード社会の盲点をつき「負け犬」的30代女性の生き方をネガティブな視野から人間喜劇として描いていた。いずれにしろメロドラマのような予定調和な演技では成立しないドラマだ。司会（石橋氏）は「悪女」にみる屈折した人間描写に没入した二人の女優から終始楽しい饒舌をたくみに引き出し、成熟した「大人のドラマ」に酔った3時間だった。

（編集部）

新刊紹介

『そんな言い方ないだろう』

梶原しげる　（新潮新書）

〝放送界コトバ3人男〟といえば『お元気ですか、日本列島』（NHK）の「気になることば」コーナー（16時40分ごろ）の梅津正樹アナや『永六輔その世界』（TBSラジオ）の「明解三ちゃん」とこの梶原しげるだが、前作『口のきき方』が好評で本書はその第二弾。事例が豊富で読ませる。

私家版 芸界秘録

―その八　島田正吾―

男の花道

嶋田　親一

「島田ッ！」「大島田ッ！」と絶叫に近い声があちこちからとんだ。チョン！　柝が入った。チョン！チョン！チョン！と柝が刻まれるのに合わせるように棺は霊柩車にはこばれた。平成十六年十一月二十九日の昼、そこは閑静な住宅街、目黒区平町。竹林に囲まれ、静かなたたずまいの島田正吾邸。

十一月二十六日午前四時四十五分。眠ったまま帰らぬ人となった。島田正吾、享年九十八歳の生涯である。一階の茶の間を改造して病室にし、ベッドを置き、縁側から庭へ、庭から門へと、外に渡り廊下が作られている。まさに、舞台の花道である。

「島田ッ！」の掛け声と柝の音にのって棺が花道を通る。先頭に緒形拳と若林豪。もと新国劇の座員たちが棺を支え、私も門の前で迎えた。後にたっていた五大路子が泣きながら「島田ッ！」と声をかけた。

島田正吾との長い歴史、ドラマチックな出来事が一瞬のうちに甦ってくる。私は嗚咽をこらえた。十二月十三日の誕生日に会えると思っていた。あと十四日。その日は島田正吾が「白寿」を迎える日だった。

親子の縁

「息子さんですか？」と何回言われたことか。目もとが似ていると勝手にきめつける人もいた。違う！てェの！　とその度に言う。島田正吾の本名は服部喜久太郎なんだからとムキになって私は答える。だが、信じられないことに島田正吾本人が、酒も入っていないのにとんでもないことを言ってのけた。

名古屋にある有名な鳥専門の料亭。ひとり娘右子ちゃんと私の三人だった。右子ちゃんは、初めて会った時が十歳で、いつのまにか私のことを「お兄イチャマ」とよんでいたからたまらない。あの紳士の島田正吾が真面目な顔で料亭の女将に「実は昔ね、これはぼくの息子でね」と言ったもんだ。女将は「げっ」と驚き、「はい、はい。誰にも言いません」と誓ったのである。島田正吾はその後満足気に、一人で悦に入っていた。完全に信じ込まれた。その後一回その料亭に行ったが、それからは遠慮した。店の者が声をひそめて、私に「若！」と言い出したからである。

私が劇団新国劇に入座したのが昭和二十五年十月の新橋演舞場。初日が開いて三日目に劇団総会が終演後に開かれた。正面に島田正吾、辰巳柳太郎、そして浜田右二郎総務の三人がデンと座り、座員がそれに向かって座る。百二十名の大一座。おもむろに議長の浜田総務が呼んだ。「島田君」。十九歳の私は一番後の末席にチョコンと座っていたが跳び上がった。「ハイッ！」。全員がふり向いた。浜田総務は慌てて「いいんだ、いいんだ。君のことじゃないんだ」。一同はドッと笑った。その日から私は一躍有名になった。

翌日、浜田総務に呼ばれた私は、筆名を檜真一郎として登録された。が、本名がシマダということが知れ渡っていたので座員からは大切にされた。当時、私の印鑑は「島田」。山偏はついていなかったのでアパートの保証人欄に書かれているサイン「島田正吾」の下にハンコをバンバン押した。先輩達が優しくしてくれたのはそのおかげで、偽のサインだったかどうかは私は知らない。

「檜クン！」と文芸部に飛び込んできたのは島田正吾を支える賢夫人、栄子夫人。「あなた、シマダのハンコ貸して……」。その頃は戦後だというのに何故かみな明るくおおらかだった。

謎の文箱？　その行方

衝撃が走った。その瞬間、歴史が動いた。昭和四十六年（一九七一）十月四日夕方。株式会社新国劇の緊急役員会が、銀座ホテルダイエーで開かれ、議論は三時間に及んだ。その日は、私が新国劇の代表取締役社長になっての初会議であった。私は親会社のフジテレビから財政立て建て直しを厳命され、観客動員対策に新しい体制を求められ、後がない責任を問われた究極の人事で社長に任命されていたのである。私は、ドラスチックな改革案を示し、向こう一年間、経営方針、劇団運営、演目決定など私を中心にしたフロントに一任してほしいと島田正吾、辰巳柳太郎に突きつけた。空気は凍った。シーンと静まりかえった。長い長い間があって辰巳柳太郎はかすれた声で「わかった。俺は君に一年あずける」と言った。また沈黙の時間がたった。

やがて重い口調で一言、一言噛みしめるようにして島田正吾が言葉を吐いた。

「辰巳ィ。長いつきあいだったな。俺は新国劇をやめる」

来た！と私は思った。ここまでだった。

「島田と辰巳が別れて、なにが新国劇ですか！」。私は一言、声をふりしぼって言った。閉会にした。

新国劇という船は、フジテレビという港から再び航海に出て行った。

何年かたって二人きりになった時、島田正吾は私に一言。

「ぼくが死んだら、文箱を開けていいよ」「え？　何か書いてあるんですか？」と訊くと、ほんとうのおやじの顔で「あの時のことも、いろいろ」と言って微笑した。何故か胸に深く突き刺さった。

お通夜の前の夜、駆けつけた私は、喪主であるかつての右子ちゃん、今の林右子夫人にそのことを言った。

「文箱？　そんなの、ないわよ」

「そう……」

「もう見せなくてもいい、と思ったのよ」

と言って右子ちゃんは、おやじそっくりの表情で微笑んだ。

（敬称略）《次号はジュディ・オング》〔川崎市・昭和25高〕

―お詫び―

予定を変更して急遽、「島田正吾」おやじの追悼にさせていただきました。

以上は嶋田親一氏母校秋田県立中央高校の同窓会誌に連載中のコラムを（氏の快諾をえて）あえて紙型のまま転載したものです。

訃報

酒井　昭さん

享年　七十二

2月17日、亡くなられました。酒井さんは1933年東京下町生まれ。山形放送で現場制作に関わり69年民放連に入る。『月刊民放』編集長などを経て専務理事。とくに地方局の発展と連帯に尽くしました。昨年本会に入会した矢先でした。

著書に『社会と放送』など専門書のほかに『ある学童集団疎開の記録』がある。生前のことば「…私らの世代はね、なまくら四つなんです。右でも左でも四つに組める。柔軟にして曖昧でしょうか。少年時代の疎開体験で得た独特な生きる知恵でしょうか」。　合掌

あしたに去ぬ
ゆうべの心千々に
何ぞはるかなる
君をおもふて岡
のべに行つ遊ぶ
をかのべ　何ぞ
かくかなしき
蒲公の黄に薺の
しろう咲きたる
見る人ぞなき
～「北壽老人を
いたむ」　蕪村

ヒト・モノ・カネの世の中ですが考えるまでもなく放送人は人々との往還にかかわる仕事が主軸です。忘れ得ぬ人々への思い出、残された宿題について、綴ってみましょう

放送人の証言（その10）

TV表現を模索した「報道」原人たち

久野浩平

今回は報道関係の5人の方々の「証言」を紹介することにしましょう。

最初は田英夫さん。共同通信の社会部長、文化部長を歴任し六二年からTBS『ニュースコープ』で日本初のニュースキャスターとして活躍した田さんについては今更説明は不必要です。田さんの「証言」では、ニュースを書く記者から「語る」立場に変わったときの戸惑い、ニュースキャスターの在り方を求め訪ねたアメリカのCBSでの研究など、興味深い話題の中心は何と言っても六七年、ヴェトナム戦争下の北ヴェトナムに西側のテレビとして初めて入り、取材した経緯、ヴェトナムでの体験、さらには芸術祭参加作品『ハノイ・田英夫の証言』に至る熱い思い出です。翌六八年、TBS成田事件で政府与党の干渉を受け、田さんは『ニュースコープ』を降板、その後参議院議員に転身します。

「権力を握ってる、つまり政権をもつ人達というのは、自分たちのこの、出来れば言いなりになるジャーナリズムが一番好ましいと、こりゃまあ原則みたいなものだと思いますね（中略）だからそれにたいしてやっぱりジャーナリズムは圧力を受けたときは、ちゃんとそれに対応出来るような機構とか、やり方を考えなくてはいけんないんじゃないかという、それを痛感しましたね。反省してみると、ニュースと意見を両方ごちゃまぜにしてること」、つまりキャスターとコメンテーターは別々であるべきだ、と田さんは語っています。

川竹和夫さんは五〇年、放送記者としてNHKに入局しました。以前柳沢恭雄さんの「証言」でも触れましたが、日本に放送記者が誕生したのは戦後早々の四六年でした。その後四年間の空白があり、NHKが定期的に採用を始めたのは五〇年から。というわけで川竹さんは放送記者の草分けであり、その「証言」はまず放送記者の歴史、仕事内容、記者クラブの役割を詳細に語ります。八年間の記者生活の後、テレビニュースの編集を担当、ニュース番組の形式を模索することになります。フィルムを流すだけのニュースから、アナウンサーの顔出し、やがてニュースショーへの発展、その他ケネディ暗殺を伝えた初めての衛星中継、東京オリンピックなど川竹さんの「証言」は豊富な話題に満ちています。

「僕はね、昔から記者クラブ批判派だったが記者クラブにどっぷり漬かっていたもんだから言えることだが（中略）要するに警察の場合だったら警察にだけ近いんであってね、じつは事件にちっとも近くないわけでね」

次は小倉一郎さん。四九年NHK入局、BK報道部に配属されます。先述のようにこの年は放送記者の採用は中止されていました。そこで当時流行の週刊誌のツルーストーリーをヒントに、小倉さんはラジオの録音構成に興味をもちます。その後、テレビがはじまり、フィルム構成を手掛けますが、両メディアの違和感はなかった、結局はインタビューが重要であり、その点ラジオもテレビも変わらないからだと「証言」します。五八年、小倉さんは「日本の素顔」で水俣病を取り上げ、大反響を呼びます。その後も数々の話題作がありますが、小倉さんの「証言」はほとんどドキュメンタリーに終始します。調査報道、ルポルタージュ、セミドキュメンタリーなどについての考え、TBSの「現代の主役」やNTVの「ノンフィクション劇場」の作品についての批判と共感を、熱感しながら語り進む姿が印象的です。

「ドキュメンタリーの取材や手法はみんなやり尽くしたが、前の人はよかったと、今の人間は不幸だと言う意見も聞きますよね。ぼくはね、逆だと思う。いろんなノウハウがあるんだからあとの方が得なのは事実だから、どんな方法を使ったってかまわねえんだから、だからね、信念をもつか持たないかと、その違いじゃないかと思うんですよ」

自称「テレビ原人」の宇野昭さんは五三年、開局前のNTVに入社、混沌の中で試行錯誤するNHKやNTV番組の詳細なモニター業務に専念、放送のあらゆる分野に通暁したといいます。運行経験者として五五年開局のKRT（現TBS）に誘われ、約十年MDとして勤務、今度は「運行の神様」となります。その後報道局に異動、七五年報道局長としてテレビ高知出向、全国に先駆けてENGを導入し、TBSに復帰後は単なるお知らせだった天気予報の番組化に着目し、CGを利用した「ウエザー・ショー」を開発、人気番組にしたのも宇野さん。

「とにかく開発競争はすごいものがあるんだね。機材だけが先端的だが、じゃその機材をキチッと使いこなせる制作者。ジャーナリストが生まれ視聴者に送り届けているだろうか」

最後は浅田孝彦さんです。浅田さんは婦人雑誌の編集記者を経て五八年開局のNET（現テレビ朝日）に入社、社会教養番組を担当します。開局時代のNETをめぐる証言の数々もありますが、浅田さんといえば何といっても「太島則夫モーニングショー」（64年4月）スタートの事情でしょう。

現在のワイドショーやニュースショーの原点であったこの番組を始めるに当たり、ナマのショー番組とは一体どういうものか、ニュースを伝える演出とはどういうことか、浅田さんが考え続けたテレビ論「スタジオ中継」の思想が語られます。

「ニュースは客観的な事実を伝えるだけでいいのでつべこべ言うべきじゃない？　だけどもここにこういう事実があるよ、ね、これをどういう風にうけとめたらいい？　それを司会者をまじえ話し合おう、それだけじゃない。それを視聴者を巻き込んで話そうよ、タリー（符号）の付いてる一台のカメラ、これは何十万何百万の視聴者を代表する《一人》なんだ、ということを意識させて司会者にしゃべらせた」といいます。どこか田さんの思いを彷彿させるような貴重な「証言」でした。

ラジオの広場

ラジオ現場の影、そして光を

石井　彰（編集　放送作家）

今年はラジオ放送開始八十年のおめでたい年です。ところがライブドアによるニッポン放送買収劇、ラジオ広告費がインターネット広告費に抜かれるなど、ラジオの未来は厳しいことを実感させる、幕開けとなりました。

ラジオの危機はこれだけではありません。むしろ静かに進行する「制作技術の断絶」こそ、憂慮すべき事だと感じています。

今春の人事異動でも、制作現場から多くの優れた制作者がいなくなりました。音楽エンターテインメント番組を作らせたら並ぶものがいなかったTさん、粘り強い震災報道を続けてきたYさん、地方でドキュメンタリー番組の制作を続けていたSさんなど、個性ある番組作りの担い手たちがいなくなったのが、残念でなりません。

ラジオの場合、制作者は一人のことが多く、なかなかその制作技術は共有されにくい。つまり、その制作者がいなくなると、番組自体が作れなくなるケースが多くなります。

いまや民放でラジオドラマを作れる制作者はほんの数えるほどです。そしてドキュメンタリーも同じ運命をたどろうとしています。ラジオならではの制作技術を伝承し、お手軽な生ワイド一辺倒の現状を変えて、多様な番組作りを取り戻すことが急務です。

そのためには、《ラジオの会》が主催する「オーディオ作品制作セミナー」や、ギャラクシー賞ラジオ選奨委員会が開く「優れたラジオ番組を聞く会、語る会」（6月18日（土）13時～　於北千住THEATRE1010）などの取り組みは、とても大事なことです。

そして貴重な制作体験を持つラジオOB・OGたちが、もっと現場に声をかけられる関係と環境が求められています。

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

中越地震から七か月、いま被災地では

山本　安幸（エフエム雪国）

新潟県中越地震からあっというまに七か月が過ぎました。被災地では地震と十九年ぶりの豪雪が重なり、傷んだ地盤に大量の雪解け水が流れ込み、被害が拡大しています。全国有数の米どころですが、農道、水路、棚田の崩壊など、雪解けとともに新たな被害が起きています。

いま被災地では本格的な復旧作業が進んでいますが、経済的な負担の大きさが復旧を阻んでいます。地震で破損した家を修理して住み続けようと思っても補修のための補助金はでません。家を全部壊さなければ、整地費や解体費が出ない仕組みになっているからです。これでは年金暮らしの御年寄りには家屋の修復は困難になります。

国は「私有財産の形成（家屋の建築・修理）には税金の投下は出来ない」という立場を変えていません。しかし地震で揺れた家を元通りに直して暮らすことを、私有財産の形成の名の下に切り捨ててよいのでしょうか。

私が住む長岡市高町団地は、山の頂上部を削ったり、崖の部分に盛り土をして造成された場所です。そのため今回の地震により大きな被害を受けました。私の家は地盤そのものが傾き、家の真下に大きな亀裂が発生しました。

県の住宅再建補助制度を利用するには三月中工事完了が条件でしたので、急ぎ工事を始めましたが、家屋の修理だけで一千万円以上かかりました。

阪神淡路大震災を体験した兵庫県では、年間五千円の会費を払うと住宅の再建・補修費用を六百万円まで支給する共済制度を始めました。こうした被災地の実情に見合った知恵＝システム作りを、行政には切望します。

そして放送に携わる皆さんにぜひお願いしたいことがあります。それは被災地の現状を継続的に報道すること、そして被災者にとってあまりにも厳しく貧しい被災者援助の仕組みを、ぜひ取り上げてほしいのです。

さて新潟県内のコミュニティFM9局では、次の地震に備え放送機材や人員の協力体制作りを進めています。

また家庭で眠っている中古ラジオ（スピーカー付きが望ましい）の提供を呼びかけています。皆さんの家で使っていないラジオがありましたら、ぜひ左記までお送り下さい（送料もご負担頂けると助かります）お願いします。

FM雪国は、地震により通常売上げの3割近い減収になりました。震災報道を続けながら、売上げ回復に向けて、全スタッフが営業マンとなって今日も元気に走り回っています。

新潟県南魚沼郡六日町106－1
エフエム雪国（☎025－778－500）
宛送ってくだされば幸甚です

大賞『あなた　また戦争ですよ』～その後日談

（掲載　山形新聞　5月3日号より）

太平洋戦争で若くして夫を亡くした鮭川村出身女性三人のの思いをたどったドキュメンタリー番組『あなた　また戦争ですよ～残された妻たちの手記』（YBC制作）が今年2月11日に全国放送されたのを記念し、同村の文芸同人誌「さけがわ文芸会」は、放送後に三人の元に届いた視聴者からの感想や励ましの手紙を一冊の文集にまとめた。

企画したのは、同会を主宰する鮭川村庭月観音住職・庭崎孝賢さん（77）。

「せっかくの機会。何かの形にして残さなければ、戦争がいくつもの不幸を生んだことが忘れ去られてしまう」と、番組に登場した三人に「視聴者から何か反応があれば教えてほしい」と依頼したところ「もう二度とあんな経験はしたくない」「小説の中でしかあり得ないと思っていた悲劇が実際にあったんだ」――。同じ体験をした女性や戦争から無事生還した男性、戦争を知らない若者などさまざまな世代から予想以上に多くの反響があった。

文集は「さがわ文芸」の第七三号として発行した。庭崎さんは「誰もが平和な社会を望んでいることを確信した。多くの人に伝えたい」と話している。

…以上は番組を企画制作した山形放送系列（株）山形映音社長　大類啓氏（会員）より寄せられたものです

会員名簿，05・5・15現在

（あ）合川明　青木裕子　赤井朱美
秋田完　新井和子　有馬哲夫（い）
石井清司　石井ふく子　石井彰
石高健次　石橋冠　磯野恭子
磯村健二　市岡康子　一色伸夫
伊藤雅浩　井上欣也　井上良介
岩澤敏　岩下恒夫（う）上田千秋
碓井広義　歌田勝彦　宇野昭
生方恵一　浦田彰（え）江口展之
遠藤利男　遠藤ふき子
（お）大蔵雄之助　太田敬雄
大原　誠　大原れいこ　大山勝美
大類　啓　岡弘道　岡崎栄
岡田晋吉　緒方陽一　岡村黎明
小川秀夫　沖野　瞭　荻野慶人
小田昭太郎　小田久栄門（か）
加賀美幸子　各務　孝　片岡敬司
片島紀男　勝部領樹　加藤滋紀
加藤静夫　金沢敏子　兼歳正英
金平茂紀　加納孝夫　上安平洌子
鴨下信一　河合　肇　川口和久
川口健一　川口幹夫　川竹和夫
川平朝清　河邑厚徳　河村正一
（き）岸田功　北川泰三　北川信
北出晃　北村美憲　北村充史
木村栄文　木村成忠　木元教子
（く）楠美昌　工藤英博　国枝忠
（こ）小出五郎　児玉久男　児玉孝光
後藤多聞　近藤晋　今野勉
（さ）斉藤伸久　斉藤守慶
斉藤秀夫　斉明寺以玖子　寒河江正
坂元良江　桜井均　桜井元雄
迫田朋子　笹川紀久雄　佐々木欽三
佐々木彰　佐藤年　佐藤利明
沢口真生　澤田隆治　沢田隆三
（し）重延浩　静永純一　渋谷康生
島地純　島野功緒　清水　満
下川靖夫　下重暁子　習田豊
城菊子（す）菅野高至　杉澤陽太郎
杉田成道　鈴木昭典　鈴木道明
鈴木紀郎　鈴木典之　須磨　章
せんぼんよしこ（そ）曽根英二
（た）高尾正克　高島秀之
高橋一郎　高橋　啓　高橋　泰
滝　大作　武谷雅博　田澤正稔
只野　哲　田中昭男　田原英二
田原茂行（ち）千葉勉（つ）露木茂
鶴橋康夫
（と）土居原作郎　戸田桂太
外崎宏司　富永卓二
土門正夫（な）中川幸美　中崎清栄
中澤忠正　中島　僚　中田美知子
中谷英世　中津川輝夫　長沼士朗
中村敦夫　中村克史　中村季恵
中村耕治　中村芙美子　永守良孝
難波秀哉（に）西川　章
新村もとを　西ヶ谷秀夫　丹羽美之
（ね）根津武夫（の）野崎茂
野添泰男　野田宏一郎　信井文夫
（は）萩野靖乃　橋口義春　橋本潔
林勝彦　林健嗣　林裕史　原由美子
原田庸之助（ひ）備前島文夫
久野浩平　一杉丈夫（ふ）深町幸男
福田雅子　藤井潔　藤井チズ子
藤代勝博　藤田晋也　藤久ミネ
（ほ）星田良子　堀川とんこう
（ま）松浦幸一　松尾羊一
松田輝雄　松平定知　松前洋一
松本明　松本修　松本国昭（み）
三上義智　三国　章　水上毅
水野憲一　満島保夫　三村景一
三村千鶴　宮川鑛一　宮脇厳雄
明神正（む）村上紘一　村上憲男
村上雅通　村上佑二　村木良彦
（め）銘苅栄昌（も）桃井　章
森川時久　諸橋毅一（や）矢島良彰
薮内広之　山県昭彦　山崎隆保
山崎　裕　山路家子　山田良明
山田　尚　大和定次　山名光紀
山根基世　山辺麻未　山本恵三
（ゆ）湯浅和憲（よ）横沢　彪
横山英治　吉永春子　吉村直樹
吉村誠　吉村光夫（わ）和田智允
和田光弘
佃由美子

新会員紹介

・小田久栄門　〒145－0065
大田区東雪谷3－10－10－103
（元テレビ朝日 編成局長）

・富永卓二　〒203－0032
東久留米市前沢3－11－26
（元フジテレビ ドラマ演出）

・野添泰男　〒665－0024
宝塚市逆瀬台4－2－11
（元関西テレビ副社長）

・吉村光夫　〒225－0003
横浜市青葉区新石川2－10－23
（元TBSアナウンサー）

編集後記

今回は「グランプリ」の会員推薦文がそれぞれに個性的で面白く「まとめて読みたい」の声もあって別冊付録としてまとめましたがいかがでしょうか。贈呈式のタイミングをあわせ、かつ印刷費を安くあげんとS大学非常勤講師伊藤雅浩氏の尽力で大学のコピー機を利用、かつ早急に送付しょうと八王子の伊藤邸を臨時事務局に化けさせて発送。業務が終了すれば打ち上げで〝酒亭 伊藤庵〟に再度化けたのは言うまでもありません。奥方に感謝！（M）

2005 放送人グランプリ ノミネート・アンソロジー

（付・日・韓・中フォーラムの経過報告）

『放送人グランプリ』は会員のレコメンドによる年度賞で、誰を、どんな理由で推薦したか、長年にわたる豊富な現場感覚で選びます。その視点が在来の各賞と性格を異にするところです。

そこで今回から推薦文を筆者名を伏せてすべて掲載、公開することでそれぞれの賞のもつ意味合いを相互確認することにしました。

1．特別賞または奨励賞「アクセス」（TBSラジオ）

日本には聴取者参加による政治・社会・経済等ハードサブジェクトに関するラジオ番組が少ない中で、「アクセス」は時宜にかなう話題をとりあげ、政界・学界・経済界などからのゲスト出演を得て、いろいろな角度からの切り口で敢闘しています。

ラジオ80年にあたりノミネートします。

2．グランプリまたは特別賞　「TBS新・調査情報」編集部一同

長年にわたり放送を論じる活字媒体として、一時期の休刊はあったにせよ、コツコツと積み重ねてきた記事・論説の集積と歴史は、ある意味、民間放送の良心を活字に残してきたと言え、これから先の放送文化研究者にとっても宝の山となりうるものである。

グランプリが個人対象に限定されるものであるなら、特別賞を贈賞したい。

3．グランプリ　「あなた、また戦争ですよ　～殘された妻たちの手記」秋元隆総合プロデューサーほか制スタッフ一同（山形放送）

4年前の9・11テロ、そしてアフガン、2年前開戦のイラク、終結の見えないイスラエルとパキスタン。戦争を忘れたかに見える日本人も60年前の記憶を風化させてはなるまい。

賑々しい予備知識もなく、建前より本音の力作に出逢った。第19回民教協スペシャルのドキュメンタリーだ。

太平洋戦争での体験を手記に綴った（1988～）山形県の女性たちを追跡取材した。寄稿した戦争未亡人36名は殆どが80歳代半ばで、この15年の間に17名へと半減している。

手記の朗読を渡辺美佐子が、時代背景や女性の心情を綴るナレーションは薬師丸ひろ子が担当。制作・山形放送、テレビ朝日。

放送05年2月11日（金・／祝）テレビ朝日他33局。

4．功労賞「ウェークアップ」（制作・読売テレビ）スタッフ一同

1991年1月5日放送開始以来、土曜日朝（8時～9時25分）に大阪から正統派の報道ワイドを全国ネットで発信続ける功績には、エンターテインメント優先の今日大きな拍手を送り、大阪をはじめ地方局の活性化を促したい。

この4月には桂文珍が14年、酒井ゆきえが10年で共に降板する司会進行に、装いを新たに辛坊治郎解説委員が復帰するチャンスを逃しがたく、読売テレビのOBとして推薦させて頂く。

5．特別賞　鶴橋康夫（ドラマ演出）

「砦なき者」（制作・テレビ朝日、放送04年4月2日）が高く評価され、既に芸術選奨文部科学大臣賞に輝いているので、当会としては「特別賞」として顕彰したい。

6．グランプリ　山県昭彦

長い間、ラジオ一筋で多くの作品を手がけられ、全国で沢山のラジオ制作マンの養成にも尽力されてこられた山県昭彦氏です。

平成16年には、MRTラジオが制作した「チンドン降臨」の脚本を担当していただき、下記の如く多くの番組コンクールにおいて受賞した功績を称え、ご推薦いたします。

コンクール受賞暦

「チンドン降臨～神話の里のばあちゃん連中～」平成16年民放連盟賞・九州沖縄地区ラジオ教養部門優秀賞、

ＡＢＵ賞インフォティンメント部門受賞、ギャラクシー賞上期ラジオ部門入賞

「チンドン降臨～神話の里・高千穂からの報告～」芸術祭ラジオドキュメンタリー部門優秀賞

7．グランプリ　鈴木昭典（ドキュメンタリー工房）

鈴木昭典氏は、ドキュメンタリー番組の制作者としては現役最年長の76歳、朝日放送在籍の頃より多くの賞を取り続け「那須与一」と称されました。一貫して変らないのは、制作に対しての真摯な取り組みで目線は常に庶民。「ジャピンド」に代表される良質の番組を多く世に出してきました。

人材育成についても、教えを請う者には、系列など全く問題とせず、どんなに忙しくても時間を作り、共に考える親身な指導をしてきました。

教え方は関西系……辛辣なたとえを駆使した思わず笑いが出る的確なもので、世の中を見続けるからこそ、「この番組は社会に何を伝えるべきか？…」社会啓蒙を考えた制作を教え続けています。

現在は、長く放送界にいる自分だからこそできる仕事と「放送法」や「憲法」「震災」などに打ち込み、最近もアメリカの国立公文書館で戦時中のスクープを見つけ、テレ朝「報道ステーション」で憲法第９条のルーツと改憲・護憲の特集を制作しました。国連憲章と第９条の特番も制作すべく取材を続け、生涯現役の実践です。

地味な分野で今もヒットを飛ばしながら、チャレンジを続ける鈴木昭典氏に教えを請い続ける一人として「05放送人グランプリ」に推薦させていただきます。

8．白票

最近、戯れにけたたましいだけの放送（ニュースに至るまで）が多く、嫌悪感にかられＴＶ，ＶＴＲを見聞きする機会が極端に少なくなりました。従って、ご推薦申し上げる見識も勇気も特に持ち合わせません。

賢明な諸兄にすべておまかせ致します。申し訳ありません。

9．グランプリ　重延浩

番組制作会社テレビマンユニオンのリーダーとして、「斬新な放送番組の企画・制作を牽引した実績に対して。

10．特別賞　宮川一郎

ドラマ脚本の先達であり、長期にわたる執筆の熱意と実績に対して。

11．グランプリ　大治浩之輔（元ＮＨＫ社会部記者）

ＮＨＫと政治権力の問題が表面化した今年であるが、かつて水俣病問題やロッキード事件の際、弱者の側、国民の側に立脚して権力や財界に闘いを挑み、しかしそれ故に孤立し昇進の道を閉ざされた大治氏。

緻密な取材に基づく報道は権力や反対者をも説き伏せる力を持っていた。氏は今も一市民として報道人のあるべき姿を示しつづけて活動している。

12．グランプリ　重延浩

長年にわたる芸術番組のプロデュース力（演出力、構成力）と映像プロダクション（テレビマンユニオン）の経営力に対して。

13．特別賞　今野勉

「テレビの嘘を見破る」（新潮社刊）の出版に対して。映像界における不毛のヤラセ論争に終止符をうった功績・

14．グランプリ　金平茂紀

ＴＢＳワシントン支局長として、アメリカのマスメディアがイラク戦争では一斉にアメリカ政府よりの報道に終始した中にあって、冷静公平な視点から多国籍軍のイラク攻撃問題を報道しつづけ、本年度のボーン上田賞を受賞した。放送人がジャーナリストとしての権威ある賞を受賞するのは初めてのことである。

権威や権力に支配されない真のジャーナリズム精神の報道を貫こうとしている姿勢は高く評価されるべきである。

15．特別賞　加藤義人（テレビマンユニオン）

「地球４５億年の奇跡」（フジ）など、科学的テーマを総合的なエンターテインメント、カルチャー番組にして、めざましい功績をあげている。

16．特別賞　寺尾隆（南海放送）

平成１４年度の「クマガイ草」は廃村になった部落でひっそりと死滅したといわれるクマガイ草を育てた一老人を追いかけたドキュメンタリーで高柳記念賞、ギャラクシー賞優秀賞などを受賞、１５年度は小さな島の焼きソバ屋のおばさんと近所の老人

とのふれあいを、暖かく捉えた「くもり、時々晴れ」があり、ギャラクシー優秀賞を獲得している。

17．グランプリ　是枝裕和（演出と山崎裕（カメラ）

テレビドキュメンタリーの方法を駆使した映画「誰も知らない」の成果（今年度「キネマ旬報」ベストワン、優秀監督賞ほか受賞多数）カンヌ映画祭でも絶賛され世界40カ国で上映中。

興行成績でも、オフシアターでの上映にもかかわらず若者の共感を呼び、約14億円を上回り（制作費は1億2000万円）、テレビの制作方法を他のメディア領域に拡げた功績は今後のテレビソフトの制作・流通を考えたとき極めて大きいものがある。

「誰も知らない」は映画の形をとったテレビ・ソフトである。中心となったテレビマンの二人に、映画界の賞ではなく、放送人のグランプリを贈賞したい。

18．グランプリ　綿井　健陽（ビデオジャーナリスト）

開戦前から最後までバグダットにとどまり連日「ニュース23」ほかで行ったイラク戦争の現場報道。

さらに、テレビで放送できなかったものも含めてまとめたビデオ作品「リトルバーズ（スカパーで放送、その後再編してこのゴールデンウイークに劇場公開）は、はじめてイラク戦争を住民の立場から描いた。その感動的な成果に対して。

19．特別賞　金平　茂紀（TBSワシントン支局長）

ワシントンからの優れた国際報道の実践（05ボーン上田賞受賞）数々のスクープを含めて、9・11以降ほとんど唯一信頼できるアメリカ情報を伝えた。

20．特別賞　大西　康司（南海放送プロデューサー）

テレビドキュメンタリー「わしも死の海におった」のすぐれた成果（04「地方の時代」映像祭グランプリ受賞）。02「こ・わ・れ・る」で同グランプリ、03「クマガイ草」でギャラクシー賞、ABUグランプリなど地域ドキュメンタリー分野での成果は著しい。

21．特別賞　鶴橋　康夫（テレビ演出家）

テレビドラマ「砦なき者」のすぐれた成果（05芸術選奨・大臣賞受賞）

22．特別賞　大脇　三千代（中京テレビ報道部）

テレビドキュメンタリー「大人の説明」のすぐれた成果（04「地方の時代」映像祭優秀賞、女性放送者懇談会05ウーマン賞、JNNネットワーク優秀番組賞など受賞）

23．特別賞　長井暁（NHKチーフプロデューサー）

長井氏は今年の1月30日に記者会見を開いて、NHKの番組に政治介入があったことを昨年の12月に内部告発したことを明らかにした。

その内容は2001年1月30日放送の「ETV2001」、旧日本軍慰安婦問題をとりあげた民衆法廷の内容について、事前に自民党の代議士から内容変更を迫る圧力があったというものである。

この問題は、その後事実関係について朝日とNHKの論争になり、問題の焦点があいまいなままになっているが、長井氏の発言は、政治とマスメディアの役割、特に受信料で成り立っている公共放送の視聴者に対する責任や、事前検閲の危険性など、放送業界にメディアの根幹にかかわる問題を提起したことは間違いない。

こうした放送メディアの公共的、社会的責任という問題は、最近のニッポン放送買収問題でも見られるように、民間放送でも今後の重大な課題のように思われる。

長井氏は現在、職場復帰をしているようだが、今後の放送人のありかたを考えていく上でも、彼の勇気ある内部告発の行動は今年度の特別賞に値すると思う。

24．鶴橋康夫

テレビ界屈指の熟慮した演出。底流に常に骨太の現代社会の病弊と文明批判が潜められ、そのドラマの核心にたどりつく華麗にしてシニカルなレトリックは鶴橋のみが至り得た境地と手法。

具体的作品は「砦なき者」にあるように、それぞれ現代社会の個も組織も社会そのものも確たる自分の礎点を喪い、各の振舞いの美学のなかにそれをかすかに手応えし、レゾンデートルを手中にしようとあがいている。その心と空気の密かならぬモザイク画を、巧みなストーリーテリングとミステ

リアスなテンポでマラソンに似た人生のドラマの終着点をまさぐるごとく、死の一点を不動のレンズで描いている。日本の現代テレビの一大収穫だった。

特にこの作品では、テレビ報道と人間ドラマの生成過程のなかから、舞台たるそのテレビの内包する怪しさ、根本にある人の生を痛めつけるテレビの持つ〝性癖〟といった、定かならぬ〝悪〟らしきものを自らのそれと重ね合わせつつ、血をにじませながらさいなんでいく、鋭いその批評性を高く買う。

25、杉浦圭子と「生活ホットモーニング」スタッフ

NHK総合TV午前8時35分～（11時、9時55分）のこの番組は月曜から金曜までのナマ放送ですが、その幅の広さと奥行きの深さに感心しています。

この1年で印象に残る番組を挙げれば、2004年7月26日放送の不登校問題で登場した素晴らしい女性の人間ドキュメント、それは佐賀バスジャックで傷を負った山口由美子さんでした。亡くなった塚本達子さんの話、事件後の加害少年とのかかわりも語られて深い感銘を受けました。

「暮らしがかわるモノ知り旅」シリーズも全国各地の職人さん達の優れた技にせまって実用以上に豊かな気持ちにさせてくれます。

健康のこと、食生活のこと、多岐にわたっていますが、どのような分野でも杉浦アナウンサーの司会は、相方と自然体でテーマの本質を伝えてくれます。私だったら、と必ずまず自分のこととして受けとめなおしている姿勢の賜物でしょう。

司会交替を機に杉浦アナウンサーと番組スタッフに賞を贈り、日々の放送のさらなる充実を期待したい。

26、特別賞・「あの日・昭和20年の記憶」制作スタッフ

NHK・BS2　午前6時50分～

各界の著名人が語る昭和20年。日本人は歴史に学んできたろうか？今、歴史に学ばないで、いつ学べるとうのでしょう。戦後60年の節目に（生まれた）推薦したい素晴らしいミニ番組です。もっともっと沢山の人に視聴してほしい。この番組のために受信料を払います、という人々にも出会いました。

27、グランプリ・柳井満

『3年B組金八先生』シリーズの制作にたいして

「金八」シリーズは1979年「15歳の母」でスタート、偏差値教育で無気力、無関心、無責任の3無主義ふうな生徒を生んだ土壌に迫る国語教師坂本金八の教育観と実践を通して、生徒と家庭、学校、地域をめぐって中学教育の在り方を描くドラマとして、正面を向いて絶えず茶の間に問い続けているドラマ。

最近終わった第7シリーズでは、中学生レベルまで蔓延する覚醒剤問題を中心に、タメロ飛び交う「史上最低のB組」を担当する金八先生の苦闘を描く。ドラマは家庭と地域の関係、教員室での先生間の教育論争などで、少子化時代にかえって深刻化する教室の現状をうかびあがらせる。

シリーズを一貫してプロデュースしてきたのが柳井満氏である。

坂本金八像は願望の理想像ではあっても「体制内改革か、世界像をもたぬ適応教育に過ぎない」と日教組から批判され、いまでは憲法改正を教室に持ち込む「プロ教師の会」あたりから「坂本金八は日本を歪めた戦後教育の加担者」と糾弾されている番組である。

短足、胴長、律儀にネクタイを締めるやぼったい金八に老いがしのびよる。自信を失い揺らぐ金八を「あんた、一体だれ？」と鋭く見とがめる生徒を前に再び立ち上がる金八先生。戦後教育をテーマに描き続ける希有な連続ドラマの姿勢を高く評価したい。シリーズの前途をさらに期待する。

28、奨励賞・大森美香の脚本（『不機嫌なジーン』）にたいして

連続ドラマ『不機嫌なジーン』（05・1月～3月　フジ）は、大学理学部の研究室を舞台にして、動物生態学のフィールドワークに熱中する女性（竹内結子）が、人間の恋愛感情と遺伝子とどう関係するか、種の保存における生物行動に愛は存在しないのか、などと理系の発想をめぐって巻き起こる喜劇的な人間関係をテーマにしたユニークな脚本を買いたい。かつての筒井康隆著『文学部唯野教授』を彷彿する知的社会のスノビズムを風刺した作劇は、従来の恋愛ドラマにない境地を開いた。

29、奨励賞・ドキュメンタリー『あなた　また戦争ですよ』制作スタッフにたいして

『あなた　また戦争ですよ』（山形放送、05・2／11放送）は80歳代前後の戦争未亡人たちが綴る文集をもとに、出征し帰らぬ夫や戦後生活の苦難な半生を送った妻たちを取材、イラク戦争に派遣される地元の自衛隊送迎風景と重ね合わせ、妻たちの目から戦争のむごさを訴えた作品。カメラの動きや朗読（渡辺美佐子）とあいまって、叙情性のなかに硬質なテーマを引き出すことに成功している。

30、奨励賞・三谷幸喜　大河ドラマ『新撰組！』脚本にたいして

史実を犯さない程度の虚構の魅力が大河ドラマだが、史実の吟味で大きく虚構が一人歩きし、ありえない史実まで踏み込んで登場人物たちの第2の現実味を獲得するのが「三谷大河」であり、農民青年たちの武士願望に敗者の美学をひそませた構成は、既存の大河にない説得力をもっていた。

31、グランプリ・森本毅郎と朝ワイド番組『スタンバイ』（月～金　6：30～8：30）にたいして

「オーディエンスが成熟すればするほど、感覚的な評価より中身による評価へ変わって行く（中略）。時代が求めているものはまさにフィーリングよりメッセージそのものだ」（TBS編成局次長熊沢敦）と1991年春編成で『スタンバイ』はスタートした。パーソナリティーによる軟調な生活情報主体の語り口とは違う、エディターシップによるニュースの項目別ズームアップによる硬質なワイド構成をとり、森本の明快な口跡で進行させる。朝刊各紙の動向を見定めながら、主要項目は日替わりゲスト（嶌信彦、岸井成格伊藤洋二ほか）の分析論評で掘り下げる。「絵」を見ながら横並びのタレントがワイワイガヤガヤの、お気楽なつまみ食い的テレビ朝ワイドをはるかに超えたジャーナルな本質に徹している。『今朝のファンファーレ』や構成番組『ラジオスケッチ』の伝統を生かした朝の2時間は断然テレビや他のラジオに優っている。また8時台の「日本全国8時です」の日替わりゲスト（荒川洋治、小沢遼子など）とからむコーナーはラジオの文明批評になっている。森本とスタッフの協業感が伝わる番組であり、流れ感でもたれあう現行ラジオ界にあってユニークな存在である。

32、特別賞・『新調査情報』編集スタッフにたいして

多様なスタンスをとる放送界は、制度論やメディア論、あるいは作品論などに分かれ、ともすればうち向きの理論がまかり通る。PR雑誌ながら、この雑誌は旧「調査情報」を継承し、既成のメディア学者や評論家によるメディア比較論ではない、現場感覚を重視した編集方針をとっているのが特色だ。話題を放送だけに狭く限定し、業界的視野から放送用語にたよる言説はとらない。隣接の映画、演劇、ステージ、トレンドなども幅広くとらえ、筆者の文体や論旨にこだわり、いわば「放送文人」ともいうべきステージを用意している。ユニークな編集感覚で具体的な取材ルポも多く、注目されている。

33、特別賞・テレビマンユニオンで働く人たちにたいして

いわゆるカンパニー組織にみる上下関係を排し、ヒト・モノ・カネのダイナミックな制作環境で「個」という最小限の志を自由に発想する集団の「人々」（誰か一人ではない）をたたえたい。

放送とはおおむね「見る」「聞く」の一過性型文化として甘んじてきたが、テレビマンユニオンがリードするコンテンツには、もしかすると映像を「読む」といった意識下の領域をも視野に入れた作品制作の魅力を秘めているような気がする。テレビは「時間」の文化だが、その時間がやがて「流れ」になってしまった。流れとは退廃した「時間」をいう。「時間」を作品の内実に問い直す作業にそれぞれが「匠」の人として志す集団を創立35年を機に、さらにいえばステーション・オリエンテッドな局内制作体制で先が見えない放送現場論の生きた証しとして訴えたい。

34、推薦　特別功労賞　松尾　羊一さん

放送全般にわたる多年の批評活動に対して

この1年、NHKの一連の不祥事問題を始め、昨今のライブドアによる日本放送、フジテレビの株買占めに至るまで、激震が放送界全体を揺さぶっている。こうした事態の予兆を松尾氏は90年台の初めから察知して、世のいわゆる、てだれの評論家や学識経験者とは一味違った熊さん、八さん的、庶民の目線を大切にして、時代に添い寝をしながら、内在的な批評活動を続け

てきた。テレビを批評することの難しさを百も承知の本人は敢えて、放送物書き屋と称して、この得体の知れない存在と格闘し続けているがその一見、自在に見えて、常に、自己批評を忘れない批評姿勢が番組制作者の心を揺さぶり共感を呼ぶものと思われる。ラジオ放送開始80年の今年、半世紀余り前、文化放送のラジオ番組デイレクターとして放送の仕事を始めた松尾氏を顕彰するのは、極めて、時宜に叶うことと考える。

35、グランプリ・村上雅通(熊本放送)

「記者たちの水俣病」をはじめ、いまだ通奏低音のごとく社会に影を落としている水俣病関連の秀作を世に問うた。2004年度は「流転」で、在日を含む南ロシア、ウズベキスタンなどに移住しつつ力強く生きている朝鮮半島の民族を取材し、国家と民族、ナショナリズムとグローバリゼーションの関係を問う見事なドキュメンタリーをつくって、昭和16年度芸術際個人賞を受賞した。

一方「熱血ジャゴー座・只今参上」のように博多仁輪加の流れを汲む一座の地域巡業を通して、忘れ去られようとしている地域文化、方言などの発掘・再生を試みる公開収録番組に力を注いでいる。強く推したい。

36、特別賞・藤井潔稔(中部日本放送)

「えんがわ」「鉄くずキラリ」「山小屋カレー」などのドキュメンタリー番組で、とりわけユーモアあふれる独自の作風を開拓してきた。

37、特別賞・井上由美子(脚本家)

最近のヒット作は「白い巨塔」だが一貫して水準の高い脚本を書き続けている事に対して。

38、特別賞・柳澤秀夫(NHK)

湾岸戦争時は特派員として、印象深いリポートを送り、現在は解説委員として、混迷する中東情勢を鮮やかに分析、解説している活動に対して、特別賞を送りたい。

39、グランプリ・藤井康生(NHKアンウンサー)

大相撲中継を中心とした、スポーツ放送では今やNHKのトップを行くアナウンサーのベテランだが、ゲーム番組「あなたに挑戦、ことばゲーム」の司会では芸能アナウンサーとしても軽妙な進行役を務め、オールラウンドの番組に対応している。「ことばゲーム」がこの3月で終了したのは残念だが、スポーツの実況やバラエティーの司会の中で、関連情報を巧みに挿入したり、ゲストへのインタビュー技術も中々のものである。

かつて、あのアトランタオリンピックで、マラソンの有森裕子さんから「メダルの色は銅かもしれないが……はじめて自分を自分で褒めたいと思う」という名言を引き出したのも彼のインタビューだった。NHKらしい品の良さと、NHKらしからぬ面白さがある藤井アナを同じ道を歩いて来た一人として推薦します。

40、奨励賞として・安部渉(NHKアナウンサー)

NHKの歌謡番組の司会として、このところ着実に実績をあげている。「NHK歌謡コンサート」が始まった頃はまだ未熟な点も多々目に付いたが、その後「紅白歌合戦」などの司会を積み重ね、2年前から始まった「お昼ですよ　ふれあいホール」ではアドリブがうまくなり、同じ公開番組でのフォーマルと普段着の両様の司会が身についてきた。放送の真髄である生放送の中で益々頑張って貰いたいので、奨励賞を贈りたい。

41、特別賞・今野勉

著書「テレビの嘘を見破る」昨年度、最も出色のテレビ評論だと思います。大衆的な影響力も強かったと思います。

42、特別賞・小林桂樹

「黄落、その後」の演技。老人の性、醜さ、悲しさを大変リアリスティックに表現していました。併せてこれまでの数々の名演技に対して。

43、グランプリ・奥水泰弘・桜井武晴

テレビ朝日系連続ドラマ「相棒」における脚本。娯楽性豊かな脚本のなかに、犯人と刑事の微妙な心理を巧みに描いた。視聴率も同局のなかで最高。

44、時代記憶の記録賞・「あの日・昭和20年の記憶」NHK－BS制作グループ

日本の特異年といえる昭和40年の365日を、記録と記憶にたよる日録の形で、60年後の同日時に毎日放送するこの長期企画は、テレビの記録

特性を活かすものとして出色である。

1月1日から、毎日の新聞記事と有名人らの日記・内外の映像を集め、証言者の記憶と語りを核として構成し、12月末日で終わる。取材の対象は、現在70代80代が中心で、庶民の目を軸にして選び、その人選や裏づけに時間をかけ論議を重ねている。前線に送られた学徒兵や少年兵、大空襲で肉親や多くの死者の処理を体験した小中学生らの息詰まる証言もあり、有名人の日記の中には軍部批判の文脈も見られるなど、驚きの発見もある。

45．グランプリ　MBC南日本放送「陶山賢治の時の風」の制作スタッフ（陶山賢治、山縣由美子、田上憲一郎ほか）

MBC南日本放送の「陶山賢治の時の風」（土曜18：00～18：30枠）は、「週1」のローカル報道番組である。スタートして8年目。ストレートニュースも扱うが企画もののコーナーに特色がある。じっくり腰を据えた長期取材ものが多く、これを再構成した単発報道番組で民放連盟賞、芸術祭賞、放送文化基金賞、ギャラクシー賞など多くの賞を受けている。

今回「放送人グランプリ」にこれを推薦するのは、そうした単発報道番組の「仕上がった作品に対する評価」とは別に、そうした報道活動のベースをなしている「日常業務としての報道に対する明確な姿勢を評価する」ことが大切ではなかろうかと考えたからである。

この番組が取りあげるのは基本的には鹿児島エリア内のさまざまなテーマ（目配りが実に幅広い！）であるが、特色としては、その取り組みにおいて主張型あるいは提言型であるということだろう。客観的であろうとするばかりでは、真実の報道になりきれないのではないか、というのがスタッフの思いだという。偏向といわれることを恐れない、といってもいいと。これが多くの賞を獲った単発番組「小さな町の大きな挑戦」において「いっしょになって希望を見つけ出したい」という長期取材の姿勢となって結実したのであろう。

肩書きや担当分野にわずらわされず、皆ンながそれぞれのやりたいことをやるのがこの番組のスタッフの流儀だというが、まさにその流儀を表彰したい。

46．グランプリ　「あの日　昭和20年の記憶」制作グループ（NHK－BS）

揺れるNHKながら、作り手の存在が感じられる番組は少なくない。長崎、広島、沖縄に関する米公文書館解禁資料を丹念に追ったいくつかの検証番組の外、「東京大空襲　60年目の被災地図」などは立案・実行者ルメイ将軍に迫る一押しを欠いた（原爆追求番組には話したくない取材に応じず勲章ケース～勲一等大綬章を含む～を写すことのみ許可する姿を捉えていた）けれども、放送ジャーナリストの良心が垣間見える好番組だったし、80年記念として日曜夜に月一回「平和アーカイブス」を組み、戦争にかかわる資料映像を再放送している姿勢は、当然とはいいながら、褒めて良い。むしろ応援するのが我々の務めと考える。一連の「歴史を今に」の健闘番組から、「あの日　昭和20年の記憶」制作グループ（スタッフ）を強く押したい。

47．特別賞　杉浦圭子アナウンサー

主婦的柔軟さでNHK「生活ホットモーニング」を充実させた地道な努力に対して

48．特別賞　鶴橋康夫

今更かも（芸術選奨まで得たから屋上屋？）しれないが、別格特別賞にふさわしい「砦なき者」ではある。

49．特別賞あるいはグランプリ　綿井健陽

正に命がけで真実を伝える姿勢と実行力は映像ジャーナリストの鑑であり、特別賞あるいはグランプリが妥当。

50．　三谷幸喜

賞のネーミングがむずかしいけれども、「新撰組！」でも異才を発揮したパワーは顕彰に値する。

51．企画賞　篠原朋子

「冬のソナタ」を購入した篠原朋子さんを企画賞として追加ノミネート致したくよろしく御願いします。歌舞伎でも「ヨン様マフラー巻き」をしぐさにとり入れたりしていました。

付記　なお次回の会報から「連載　グランプリ」欄を設けます。皆様の日頃推薦したい人や業績を掲載し、「賞の日常性」を図ります。どしどし投稿してください。

日中韓テレビ制作者フォーラム
予備会議速報

10月に東京で開催する第5回日中韓三ヶ国テレビ制作者フォーラムの予備会議が、5月21・22の両日、東京・神宮外苑の日本青年館で開かれた。

中国、韓国から指導的機関の幹部が3名ずつ、日本からは窓口役の「放送人の会」から大山代表幹事、山田事務局担当ら計5人が出席、フォーラムの総括代表・鄭秀雄氏を中心に討議を行った。昨年から中国が正式参加して、規模・内容共に本格化した上に、日本で初めての開催ということで、日本側組織幹部も表敬し、歓迎夕食会には共同主催者の放送批評懇談会から志賀理事長、田代専務理事ら、後援団体からNHKの福田マルチメディア局部長ら、顧問代表として原田・自民党代議士、河野・元NHK放送総局長らが顔を揃え、日本開催の成功を誓った。

フォーラムの日程は10月21日(金)から24日(月)の4日間、会場・宿泊共に日本青年館と決まっており、予備会議では内容・進行面の大筋を検討、これまでこのフォーラムの場で培った自由・率直・前向きな姿勢で議論を尽くし、合意した。日中韓三ヶ国語に通じた有能な留学生(慶応大学院生)通訳3人が、相互の意思疎通と効率的進行に大いに貢献した。出席者の全員が充分に理解し合ったことが誰の目にもわかり、友好的雰囲気が一気に盛り上がって幸先の良いスタートとなった。

第5回フォーラムの新味は従来進めてきた同一テーマ(今回は「家族の現在」)による各国作品の視聴と検討という現場的学習に加え、歩を一歩進めて、3国間の制作協力や共同制作の可能性を具体的に提案・議論する点にあり、フォーラム実施に向けての今後の準備作業も、この新地平開拓への意欲の実現を柱として進められる。会員諸兄姉の賛同・協力はもとより、幅広い差配が不可欠だろう。

閑話を一つ。2日目にCXとNHKを見学したが、CXで壁一面に貼られた番組の高視聴率獲得ポスターに、特に初来日の中国代表一行は仰天、〝市場経済原理〟のテレビ現場に及ぼす特殊且つ象徴的事例として帰国報告したいと興奮していた。また、中国の若い女性幹部は「カブキ町ハトテモ怖イ」と夜の都内散策を早々と切り上げた。(文責・鈴木典之)